

# 清沢満之『臘扇記』とエピクテトス

川 口 淳

## 序 論

—日記『臘扇記』とその倫理性—

清沢満之（以下、清沢）には『臘扇記』という日記がある。明治三十一（一八九八）年八月十五日から翌年一月二十五日までの連続した思索と、二月二十五日「偶坐案定」及び「四月五日記」からなる三十六歳当時の日記である。その日記には古代ギリシャの哲人、エピクテトスの言葉が多く書き写され、またその言葉を通して思索が記されている。エピクテトスの書を読むことは清沢にとって大なる「読書の恵み<sup>①</sup>」であった。

清沢は結核による咯血のなかで、一人の人間として、死を恐れ、生きていくことへ苦悩する。後に『当用日記』のなかで清沢は当時の周辺の事情を「人事の興廢」、

「人情の煩累」と表し、端的に苦悩の内容として述べている。<sup>②</sup>死とは何なのか、生とは何なのか、恐れとは何なのか、そして自分自身は何ものなのか、その思いが切実ならば切実なほどに、自分自身のなかに問いと、それを探ろうとする欲いが湧き上がってくる。かりにそれを求道心と呼ぶことができるならば、彼の『臘扇記』は、たんに毎日の行事のみ記されるようなものではなく、日々懐に抱き続けた求道心の思索と一筋の関心で貫かれた思想書なのである。

彼の日記『臘扇記』とはいかなることが書かれているのか。そこで思索された信念の内容は、死生の宗教的な決着であるという意味では彼の「死生観」をうかがうことができる資料である。

その日記で告白された清沢の信念は、何を問題として

いたのか。

自己とは何ぞや 是れ人世の根本的問題なり（※傍線筆者）<sup>(3)</sup>

という言葉に明白なように、自己を探求するのが問題となるのだが、それはたんなる一個人の「人生」の問題ではなく「人世」の問題として捉えていたことは注目すべきところである。彼の問題関心は、たんなる個人としての自分自身が何なのかという関心ではなく、自己と他者との関係のなかで問われてくる関心事であることに、牢乎として自覚的であったのである。それは、この世に処して生きていく、生き方である。つまりそれは彼の「倫理観」である。もっと正確に言えば、彼の問題関心は「信仰と倫理の関係は？」（※彼の『臘扇記』の言葉では「信仰と修善の関係」というものなのである。清沢にとって『臘扇記』はたんなる行事を記したものでない。死とは何か、自己の生とは何かという切なる探求であり、また同時にどう生きるか、いかに生きるかの探求であることは一目して感じ取れる。

われわれは他者と関係し生きている。しかし何に基ついて他者とともに生きるべきだろうか。その問いは、様々なことで苦悩し憂慮するものの奥に必ずある探求す

べき時代社会をこえた普遍的な課題である。

事実、清沢の『臘扇記』は、「死生への決着」（信仰）と「倫理的な事柄や善悪の問題」（修善）が中心に考察されている。

しかし、清沢思想に関する先行研究では、近年まではあまり倫理的視点が真正面から論じられることがなかった。さらに先行研究によつては、清沢という人物は、しばしば、社会性や倫理性の欠如を批判される。清沢の思想には多様な評価がある。その評価の一つひとつを詳細に検証することはできないし、評価の多様性を否定する必要もない。しかしその評価の多様性の中で問われている関心の一つに、清沢の考える倫理や善悪をどう見るかという事がある。

また『臘扇記』解釈においては清沢の思想に重点がつかれエピクテトスとの思想的な関係性に未だ不鮮明さが残っている。もともと『臘扇記』という日記は、浩浩洞出版の『清澤全集』（大正四年）に掲載されて世にでたときには、編集されてエピクテトスの引用がかなり省かれてしまっていた。その省略の意図も後の研究者によつては、清沢の「真宗の人物である信用性を護ること」<sup>(4)</sup>にあったのではないかと推測されている。その真意は今とな

つてはわからないが、ある立場上の解釈意図に自覚的になることは難しい。

ところで、私が本論文を執筆する上で示唆を受けた研究は、一つだけ挙げるとするならば、今村仁司の清沢研究である。今村は、「死の倫理的 성격<sup>(5)</sup>」という節題を設けて、死というものを修練することが倫理的な事柄であると述べた<sup>(6)</sup>。彼はそこで清沢の死生観と倫理を分断して考察されるべきではなく、極めて密接に考察されるべきであることを示唆している。またその強力な根拠はこの『臘扇記』にあると思われる。

さて、本論文では、『臘扇記』を私なりの視点で考察していききたい。その視点とは、『臘扇記』の中に多く引用されているエピクテトスの思想が清沢に何を与えたのだろうか、あるいは清沢が何を学んだのだろうか、という問いを通して、清沢がたんに内面に沈潜する思索にふけたのではなく、自己の倫理性について考えたという面が強くあることを論じていきたい。

その論述に入る前に少々前提が長くなるが、次節では「三つの日記」として清沢の書いた日記についても少しふれ、その次の節では、「エピクテトスとの出会い」と題して『臘扇記』の位置づけを考えていく事にする。

## 一、三つの日記

清沢には、明治三十一年一月一日から翌年の三十二年一月二十五日までの約一年一ヶ月のあいだ、一日も欠けることなく記された『病床雑誌』『徒然雑誌』『臘扇記』という三つの日記がある。実にこの三つで清沢の現存する自筆の日記の六割を占める<sup>(7)</sup>。それらの日記は清沢が「信念の確立」と一貫して語る課題のもとで思索された「人生記録（ヒューマン ドキュメント）」<sup>(8)</sup>であった。

『病床雑誌』と『徒然雑誌』は、初期仏教の聖典『阿含経典』や『仏本行集経』などの釈尊伝とともに思索され、また『臘扇記』は、ギリシャの哲人「エピクテトス」の言葉とともに深められた思索であった。

清沢は近い人に、『阿含経』とエピクテトスの言葉と『歎異抄』を「予の三部経」（余の三部経<sup>(9)</sup>）と語ったという証言があるが、そのことによってもそれらの書物の思想と清沢思想の連関を研究することは必要である。また事実そうされてきた。

『病床雑誌』、『徒然雑誌』に紐解かれるのが特に『阿含経典』である。その経典を読んだ清沢は、「生死巖頭の観に住すること尤も必要たるを知<sup>(10)</sup>」<sup>(10)</sup>と語り、「生

死巖頭」という実存的課題のもとで読誦したことがうかがえる。しかし『病床雜誌』『徒然雜誌』では、經典の要約された抜き書きが大半であり、清沢自身の思索が語られることは少ない。それが研究のし難さの一要因であるのか未だに多くの研究はなされていない<sup>(11)</sup>。

一方でエピクテトスの言葉については、『臘扇記』に引用と彼自身の思索や訳出が多く存在する。もちろんその他の文献からの引用もありそれらのことをないがしろにすることはできないが、さしあたり、清沢がエピクテトスの思想から学んだことが、彼の信念に重大な影響を与えていることは言を待たないのである。

まず清沢はエピクテトスの思想とどのように出遇ったのであろうか、そのことを考察していきたい。

## 二、エピクテトスとの出遇い

清沢のエピクテトスの書との出遇いについて『臘扇記』や書簡、『教学報知』などを参照して描写してみよう。

清沢が日記『臘扇記』を綴り始めてからしばらくたった日、宗門人にとっては一大事件が起こる。明治三十一年八月二十三日に起こった新法主及び連枝の失踪事件<sup>(12)</sup>で

ある。この顛末は、石川舜台参務等の計らい<sup>(13)</sup>が発端で、これから宗門を背負っていく新法主たちに本山を離れて社会の中で青年布教と勉学を研鑽するように内密に留学させたのであった。この事件は瞬く間に全国を駆け巡り、様々な人の賛否を叫んだ<sup>(14)</sup>。石川参務が内密に計画したのは、順序立てて賛同を得て留学を決行すると、反対されて余計難しくなりかねないとふんだのである。

清沢にとって新法主は思い入れの深い人物である。彼は、数年前、新法主の教育係を務めたこともある。しかし当時の新法主は、本山の任務のため、講義勉学を欠席しがちになりなかなか集中的に修学することができなかった。それを嘆き、清沢は、連名で本山に建議してその現状を訴えるほど、新法主への教育に熱心に取り組んだのであった<sup>(15)</sup>。そんな思い入れの深い新法主が、留学して学問研鑽される勇断を喜び、自坊でその留学の報告演説会を催し、涙を流して新法主の決断に感謝した。さらに西方寺の満堂の聴衆も涙で袖を絞ったと報道されるほどであった<sup>(16)</sup>。

その数日後、京都へ出発。清沢の友人であり、白川会員の月見寛了、清川円誠、今川覚神などのメンバーに会い、新法主の決断へ感謝の意を本人に伝える方法を話し

合い、それを東京にいる村上專精に細書してもらい新法主へ渡すこと、を決した。

すると数日後、新法主の側近、葦原林元より（※清川宅へ？）「スグノボレ」の電音を受ける（※この数日間新法主と村上專精が接触したかは未確認）。その命により、京都から三河西方寺に帰寺し、早速次の日には月見と合流の後、東京に十日間、旅立っている。その間に約一年前の宗門事務革新運動で東京の主導の立場であった、村上專精、南条文雄、近角常観などに会い、また新法主に拜謁。石川舜台參務や、友人であり改革運動賛同者であった沢柳政太郎・稲葉昌丸などをはじめとする様々な人と会合する。

そのような中、清沢は九月二十七日、沢柳政太郎宅において開催された「宗教的経験談話会」に出席するために、同宅を訪問した。

その時、かねてより気にかかっていた哲人、エピクテトスの書を、沢柳政太郎の書架のなかに発見する。清沢は、沢柳政太郎から借り受けた洋書を幾度となく読み、その思想の中に飛び込んでいった。同日、二十七日からエピクテトスの言葉が日記に綴られるようになるのである。

清沢はその洋書を「エピクテタス講話」とか、「エピクテタス氏教訓書」と呼んだ。その書は、*The Discourses of Epictetus: with the Enchiridion and Fragments.* (Translated by George Long (1801-1879), London, 1877. という名の哲学書が比定される（それを本論では、*Epict.* と略記して用いる<sup>(17)</sup>）。

### 三—1、エピクテトスの思想とその影響

— 如意なるものとは何か —

『臘扇記』は人に見てもらうために書いた解説書ではない。それゆえに、エピクテトスの思想をある程度おさえないと『臘扇記』は読めないことは言うまでもない。そこでエピクテトスの考えたことに少し足を踏み入れてみたい。

まず、エピクテトスは「心」というものをどうとらえていたのか、から見ていこうと思う。彼の基本概念に、「心像 (appearances)」という言葉がある<sup>(18)</sup>。それは、われわれの心がさまざまな像を作り上げることという。要するに、われわれはさまざまものを心に思い描く。善ではないのに善であると見たり、避けられないものを避けたいと思う。そして例えば、死のように避けられない

ものを恐怖する。そのように心に様々な感情があらわれてきて、人はその思いに強固に固執して、もがき苦しんでいる。

その苦悩の状態が生じるのはなぜか。それは彼によれば、「理性（道理、ロゴス）に適っていないことを追い求めることによって、情念（パトス）が起る<sup>19</sup>」という。わかりやすく言えば、求めても思い通りにはならないような道理になつていないものを求めることで怒り苦しむのである。

われわれは、外物を自分の思い通りに変えたいと思う。それができないなら、邪魔立てするものを排除しようとする。それができないなら、罵ることのできるものはずべて罵る。エピクテトスは「神々でさえも罵る<sup>20</sup>」のが人間であるといった。

ちなみにエピクテトスの「神」とは、自然の道理の崇敬した言い方に近いと思われる。清沢は、儒教的な「天」、仏教的な「他力」という訳語などをそれに当てていると考えられる。（神の考察も後で触れる。）

『臘扇記』には、「天を怨む<sup>21</sup>」るといわれる。そのような天をも怨むとか、神々を罵るということとどう対峙すべきなのだろうか。それには、エピクテトスの重要

な鍵概念を捉える必要がある。

in our power, not in our power<sup>22</sup>（われわれの権内にあるもの、われわれの権内にないもの）「如意なるもの不如意なるもの<sup>23</sup>」という概念である。

「如意なるもの、不如意なるもの」とは、清沢が『臘扇記』において当てた訳語である。「権内にあるもの権内にないもの」と訳される言葉である。

先にも述べたように、われわれはさまざまなことを心に思い描く（「心像」）。思い通りにならないものを追求め、魂を奪われたように外物へ隷属する。不如意なるものを追求めることからくるのである。そこには心身の苦悩が存在している。

反対に、われわれにとって自由なものがあるとするならこれだ。

それは、われわれが何かに対して、いかなる意見を持つのか、何を望み、何を嫌うのか、といった主体的な立場を吟味していく力において自由なのである。主体的に立場を選ぶことができる力が、私たちの権内にある。

その立場を吟味する力を「理性的能力」と呼び、選ぶ力を「意志」と呼ぶ<sup>24</sup>。これを如意なるものという。

それは、心に映る対象に意欲したり拒否したり、求め

たり避けたりしようとすることを吟味させ立場を選択することが出来る「神」から人間に与えられた能力なのである。人間は神から与えられているものに感謝しなければならぬ。例えば、見ることや聞くことなど自身に備わった能力のこと、そして生きること、そしてその生きるために必要なものたちのことを、そしてそれ以上に、それらすべてのものを使用する能力、吟味する能力、価値を考える能力を与えられている、つまり理性的能力を与えられていることが最も感謝すべきところであり、またそれは例えば、「見ること」は眼によるのではなく、「意志の能力」によるといように主体的に意志でできる能力なのであるとエピクテトスは考える<sup>(26)</sup>。

神は「心像の正しい使用だけはこれをわれわれの権内に置いたが、その他のものはこれをわれわれの権内に置かなかつたのである。」と、エピクテトスはいう。

われわれの権内にあるもの（清沢のいう「如意なるもの」）とは、心に思い描く様々なものと向き合い見つめようすべきか判断する力、理性的能力と他のすべての能力を使用する「意志」のことである。それは心像の正しい使用とも言う。これは、自然の道理にあうように生きる力である。

また人間には様々な妄念妄想が湧き起こる。その思いには、欲望してねがい求めても得られない、厭い避けようとしても避けられないということがあり、それで苦悩することがある。例えば、「疾病死亡貧困は不如意なるものなり／これを避けんと欲するときは苦悶を免る、能はじ<sup>(27)</sup>」と清沢が引いている。病や死や貧困というのは苦悩の代表格であるが、それらは避けようとして避けられないものではない。

ところでわれわれがエピクテトスの思想の中で誤解しやすいのは、彼が外界のものは如何ともすることができないが、自分の心の内面の意志については自由に変えられるから、外界を断念して心の中で平安を得るのだという精神論者であつたとする事である。

エピクテトスは、人は避けることができない不如意なるものに直面することがあるが、人が、それに影響を受けて自らの態度が乱れ他者を恨むなどの問題をできるだけなくするために説いている。エピクテトスの重要な用語に「意志」(προαιρεσις, will) があるが、それは理性的能力の能動的な側面を表しているものであり、意志的能力も理性的能力も神から与えられた能力である。だから、意志とは神の意志を想定しているべきである。われわれ

が神と親類であることに基づいた自らの「意志」である。

それは「世界市民」として倫理的主体を志向する者となることであろう。エピクテトスは、たんに自分の心の内部の意志によって、外界を断念して苦悩から脱却するよ  
うな精神論を述べているのではない。むしろ、エピクテトスはどんな場合でも、外界のものによって、生き方が妨げられたり、曲げられたりしない主体性について説こうとしたのであろう。意志とは、本当の価値を吟味する理性の能動的な面を言い当てたものである。ゆえに、むしろ神と関係する「意志」において人間は初めて自由と  
言えるのだと考えていると思われるのである。

エピクテトスが説いた人間の生き方の核心は、死のよ  
うに自然の道理から避けられないものを避けるのではない。自然の道理に反しているものを避けるということこそ本当の避けるである。<sup>28)</sup>

自然の道理との一致（＝理性的な）した生き方を語っているのが以下の文である。

（人間にとつての）進歩はどこにあるのか。もし諸君の中の誰かが、外物から身を引いて自分の意志に向かい、それを形成し完成して、その結果自然本性と合致して、気高く、自由で、妨げられず、邪魔さ

れず、誠実で、つつしみがあるようになる……

（鹿野治助訳『人生談義』上、p.88）<sup>29)</sup>

エピクテトスが「自由」といった主体的な生き方は、自然の道理との一致を選択することができる生き方なのである。この生き方こそ、エピクテトスのいだけ「哲学する」ことである。彼によれば、哲学は「どんな場合でも、指導能力を自然本性にかなうように保持するだろ<sup>30)</sup>う」と約束する。この命題が彼の哲学の定義の一つであろう。

「指導能力」とは、心を支配している能力である。<sup>31)</sup> わかりやすくいうと、人間の心のはたらきを自然の道理にかなうよう保って生きるために哲学するのである。その生き方の重要な鍵となるのが、死の恐れに対してどのような姿勢でいるかということである。それを次に考察してみよう。

### 三―2、エピクテトス思想とその影響

#### ―死の恐怖―

<sup>32)</sup> Epict. 「第二卷第一八章、心像に対していかに戦うべきか」を短くまとめるとこんなことが説かれている。人は火に薪を投げ入れ炎が燃え上がるように欲望が大きく



成長していく。人はその中に理性という火消水のようなものが適用されなかったならばどんと炎が増大していくのである。理性とは先にも述べた自然の道理に合わせようと思考し、自己の立場を吟味していく能力である。人の心が大嵐の時に大波を立てているのは、この理性が追い払われているときである。その嵐を沈め心に穏やかな風と晴れやかな大空が訪れるには、「死の恐怖」を取り去るのがいいと説かれる。以下はその文脈の中から『臘扇記』に書き綴られたところである。

Take away the fear of death, & suppose as many thunders & lightnings as you please, you will know what calm and serenity there is in the ruling faculty.      *Ephit.*, Bk. II, Ch. XVIII, p. 162. (『全集』8-p. 354.)

死の恐怖を取り去るがいい、そして君の好きなだけの雷鳴と、電光とを持って来るがいい、そうすれば、指導能力の中に、どれほど大きな風と晴天とがあるかがわかるだろうから。

(鹿野治助訳『人生談義』上、p. 202.)

死の恐れを解決するのなら、雷鳴のごとき動乱にも心を乱されることがない、と説かれている。このエピクテ

トスの言葉は清沢の人生にとって大きな意味を持った。彼が、何人もの友人への書簡にこの言葉を書き綴っているほど記憶に残った言葉である。<sup>(33)</sup>

「死の恐怖を取り去るがいい」とは、すなわち、死の恐れが苦悩の根本であるのだから、その解決こそが他の苦悩の解決にもつながるということである。それが、清沢がエピクテトスから学んだ道なのである。<sup>(34)</sup>

清沢によれば、恐れとは、自分が何かを損失するのではないかという所からくる。それゆえに最大の根本的な恐怖は命を失う恐れである。<sup>(35)</sup> われわれの心は、所有への欲望と損失への恐怖に纏縛されている。そして、苦しみ、不安、悩みも、そこから生じる。

生死は人界の最大事件 如何なる人事と雖とも一死  
此が終りを為さ、るはなし 故に吾人若し死に對し  
て覚悟する所あれは般百の人事決して吾人を苦むる  
ものなし 何んとなれば彼の般百の人事は皆一死  
(人皆只此一死を恐怖す 故に恐怖煩悶止むことなし)  
以て之を終ふへければなり 是れ死に對する觀  
索の人界に必要な所以なり

(『全集』8-p. 383. ※傍線筆者)

死にたいする覚悟があるのならどんなことが起きよう

とわれわれを苦しめるものはない。なぜなら、すべての恐怖憂苦の噴出し口は、死への恐れ、生の損失への恐れなのだから。

### 三—3、エピクテトス思想とその影響

—死の恐れを棄て去ることと、信仰と  
修善の関係について—

しかし具体的に、死生の恐怖、苦しみというものにごう決着していくのか、である。それにはエピクテトスはこう断言する。苦しみや怒りなどそれらを棄て去るには、「ただ神のみを仰ぎ、そのみに従い、彼の命令によって清められるのでなければ、他の仕方では放棄できない」と。

それが以下の文で、清沢はその部分を『臘扇記』に三度も引用する。ここでは十一月十二日から引用してみよう。

Clear away your own. From yourself from your thoughts cast away sadness, fear, desire, envy, malevolence, avarice, effeminacy, intemperance.  
But it is not possible to eject these things otherwise than by looking to God only, by fixing

our affections on him only, by being consecrated to his commands. But if you choose anything else, you will with sighs and groans be compelled to follow what is stronger than yourself, always seeking tranquility & never able to find it; for you seek tranquility there where it is not, and you neglect to seek it where it is. (『全集』8-p. 380. *Epict.* p. 153.)

(※『臘扇記』(明治三十一年十一月十二日)の引用、また下線部は十月三日にも引用している重複部分である。)

君自身の悪を清めるがいい。ここから、つまり君の心から、「プロクルウステースやスキロンの代わり」に「苦痛、恐怖、欲望、嫉妬、毀損心、貪欲、臆病、また不節制を投げ棄てるがいい。だがこれらのものはただ神のみを仰ぎ、そのみに従い、彼の命令によって清められるのでなければ、他の仕方では放棄できない。だがもし君が何か他のものを欲するならば、君は悲しんだり、嘆いたりしながら、君よりもっと強いものに従うことになるだろう、そしていつも幸福を外部に求め、しかも決して幸福を得

ることができないだろう。というのは、君はそれがない処にさがし、ある処にさがすのを逸しているからだ。

(鹿野治助訳『人生談義』上、pp. 191-2 ※傍線筆者)

『臘扇記』には、この文言の下線部が重複して書き写される。加えて、*"It is not possible to eject these things otherwise than by looking to God only"*の文は、*ωυρα*にもう一度、他の箇所に書き綴られ、計三回も引用される。

自力を捨て、他力に帰し其信仰の結果として自ら<sup>+</sup>避悪就善の為し得らるゝを期せんには(四日対面のエピクテタス氏語参照すべし)(It is not possible to eject these things otherwise than by looking to God only)さて此の如く他力を信せば修善は任運に成就され得べしと放任すべきかと云ふに決して然らず 吾人は他力を信せば益々修善を勤めざる可からず(是れ信者の胸中に湧起する自然の意念たるべし)……以下略。

英文は「これらのものはただ神のみを仰ぐのでなければ、他の仕方では放棄できない」という意味である。

ところで、エピクテトスがいう「神」とは、どういふものなのだろうか。彼は、神については、彼自身の地域

の慣習的民衆的な信仰の神、ゼウスの名を用いている。彼のゼウスは、「神々とわれわれ人間の父」であるという立場に立っている。<sup>(36)</sup> それについて、簡潔に三点だけ特徴的な言説を私なりにまとめた。

・一つ、神とは人間に生きるためのすべてのを与え、さらに吟味し判断する理性的能力を与えた存在であり、さまざまな行動のもととなる意志能力者を与えた存在であり、われわれはそれらの能力と神に感謝すること。

(cf. *Epicr.* Bk.1 Ch. 16 / Bk. 2 Ch. 23)

・二つ、神とはわれわれ人間の父である。つまり、われわれは神の子である。だからわれわれは自分についても他者についても、賤しくつまらないような卑下した見方をしない。

(cf. *Epicr.* Bk. 1 Ch. 3)

・三つ、神とわれわれはつまり親類関係にあるのだから、それゆえに、世界の人々はみな親類関係にある。だから誰に対しても、自分の利益のためにへつらう必要もなく、恐れる必要もない。

(cf. *Epicr.* Bk. 1 Ch. 9)

このように神の観念はエピクテトスにとって、神への

感謝としての信仰と同時に、自己と他者の存在そのものに尊さを見ることにより倫理を生じさせる根拠になっている。

清沢はエピクテトスの思想に、仏教の他力門の思想を身体的に消化するための重要な要素を感じ取ったのである。それは信仰から倫理へという方向性への自覚化である。つまり、清沢の思想的背景を考える場合、先程まで論じてきたようなエピクテトスの「意志」や「神」についての思想などを消化したうえで、『臘扇記』において「絶対がわれわれに善悪の観念を賦与する」ように記し、信仰から倫理へという方向性を強く自覚化していると考えられる。

また清沢の日々の信仰生活の実感からは、信仰と修善の心への循環的な営みがある。つまり、他力の信仰の結果として自ずから悪を避け善に就こうとする。しかし、善を修めることは、勝手に放任することではなく、われわれは他力の信仰に基づいて修善を勤めるべきなのである。それに修善の意志とは、他力の信仰によって自然に湧き起こるものなのだ、といっている。そしてまた、修善を勤めることによって「自力の妄念に攪乱」される自分にであいい、そしてまた自分自身に気付かせるはたらき

にであう。そしてそのはたらきを感じるたびに、「自力無功の懺悔と共に他力の恩徳を感謝するの称名」となるという。そしてまた修善の意志へと歩き出すことができ。循環的な信仰（称名念仏）と修善の関係があると清沢は感得したのである。

#### 四、自己とは何か

##### — 清沢満之の自覚 —

『臘扇記』第二号の最初には、「死」と大きく確かな文字で書かれた清沢の思索がある。意味をくみ取るのが難しい部分もあるが、私自身の解釈でそれを考察してみたい。

まず「死」とは最も原初的な自然の道理の一つである。死とは、避けようと思っても避けられないものの代表である。しかし時に、それに全力を挙げてもがき反抗するのがわれわれである。われわれには、生きたいと願う意志が、（どこかに眠っている場合もあるにせよ）ある。そして現に生きていることも道理であり避けようと思つて避けられるものではない。生と死とは実にわれわれが併せ持っている。しかし「死は生に対する最大怨敵」であり、われわれは矛盾した真理を併せ持っている

不可思議としか言いようのない存在である。自己のなかに矛盾したものを併せ持っていることが強く浮き彫りになって自覚化してくる。それならば、われらとは根本的に矛盾した存在であるというのが道理ではないか。では、われわれには到底尋ね尽すことのできない不可思議なる意味を、私自身、現に今生きているのではないか。「不可思議なる他力の妙用」によって生きそして死んでゆく、それこそ、自然の道理なのではないか。エピクテトスの思想である、「自然の道理」に合うように生きるということは、矛盾した自己そのものを受け止めること以外になかったのである。では、自然の道理にしたがって生きるという理性的な生き方は、突き詰めると、不可思議なるものへの信仰となる。それは信仰と理性の一致である。よって清沢は真の信仰と理性は対立するものではないと考えたのである。清沢の求道とは、信仰と理性の一致である。そして、実践的には信仰と修善のダイナミックな関係なのである。それを読み解くには以下の清沢の言葉を見てみよう。

如何に推考を費すと雖とも如何科学哲学に尋求すと雖とも死後（展転生死の後）の究極は到底不可思議の関門に閉さゝるものなり

啻に死後の究極然るのみにあらず 生前の究極も亦絶対的不可思議の雲霧を望見すべきのみ 是れ吾人か進退共に絶対不可思議の妙用に托せざるべからざる所以

只生前死後然るのみならんや 現前の事物に就ても其 ダス ワス Das Was デス ワルム Des Warum に至りては亦只不可思議と云ふべきのみ

此の如く四顧茫茫の中間に於て吾人に亦一円の自由境あり 自己意念の範囲乃ち是れなり *γνώθη*

*σκαυρόν* Know Thyself is Motto of Human Existence ? 自己とは何ぞや 是れ人世の根本的問題なり

〔全集〕8 pp. 362-3 ※清沢満之の原文では、ギリシャ語のアクセント脱落）

すなわち、科学や哲学は死後を考える学問ではない。生前や死後は思いはかることができない。それだけではない、現前の事物が、なにで、どんな理由で存在しているのか（Das Was・Des Warum）*γνώθη*も思いはかることができない。そして、不可思議のただ中にあるわれわれは、「自己意念の範囲」を問う存在となるという。

“*γνώθη σκαυρόν*”とは「汝自身を知れ」の意で、英文で

は、その問いこそ人間存在のモットーではないだろうか、  
と語っている。この自己への問いが、人間が世にあるな  
かで根本的な問題である、というのである。そしてその  
問いの後にこう述べる。

自己とは他なし 絶対無限の妙用に乗托して任運  
に法爾に此境遇に落在せるもの即ち是なり

只夫れ絶対無限に乗托す 故に死生の事亦憂ふる  
に足らず 死生尚且つ憂ふるに足らず 如何に況ん  
や此より而下なる事件に於ておや …中略…

絶対吾人に賦与するに善悪の観念を以てし避惡就  
善の意志を以てす 所謂悪なるものも亦絶対のせし  
むる所ならん 然れども吾人の自覚は避惡就善の天  
意を感す 是れ道德の源泉なり 吾人は喜んで此事  
に従はん

何ものか善なるや 何ものか悪なるや 他なし

吾人をして絶対を忘れさらしむるものは善なり  
吾人をして絶対背かしむるものは悪なり (…以

下略)

〔全集〕8 p. 363)

絶対無限の妙用が与えるものは、善悪の観念、避惡就  
善の意志であり、それは道德の源泉である。このことは  
極めて重要である。<sup>37)</sup> この文を見て、道德が生まれるのだ

と語っているのは一目瞭然である。「自己を知る」とい  
うことは修善の生活へ展開するのである。

<sup>38)</sup> 自己を知るとは「外物と相関係して離れざる自己を知  
る」ことである。また自己を知るとは、「自己以外の人  
物に対して、如何に交際し如何に応動すべきやを自覚す  
ること」である。この意味で倫理的である。自己知とは、  
われわれが他者とともにある自己の実感である。清沢の  
実感を完璧に推し測ることなどできはしないが、「絶対  
無限の妙用」という言葉には、無限無数の他者と共にあ  
るといふ感覚が、不可思議で、偉大で、妙なるはたらき  
として感じられたのだろう。

自己とは不可思議な妙なるはたらきに包まれ、そこに  
乗り、身をあずけているようなもの。清沢にとつて死へ  
の恐れ憂うるものを取り去る一点はそこにあつたのであ  
る。

誤解を恐れず強いて解釈するならば、彼のいう善とはそ  
の感覚を見失わない意志であり行為である。逆に悪とは  
それを忘れ逆行する意志や行為なのである。

## 五、真の友とは何か

ではそれは実際に他者とのような関係を構築してい

くのだろうか。それについて清沢がそうしたようにエピクテトスの言葉に注目してみよう。「第二卷第二章 友情について」(Bk. II. Ch. XXII. "ON FRIENDSHIP", p. 176.)の一部は『臘扇記』に引用される。

「友情について」の章でエピクテトスは、自分の利益、利害関心の自己中心性に言及する。

一般に、……すべての動物は、何によつても、自分の利益によつてほどは支配されていない……かくて何であろうと、その利益に対して自分に邪魔立てをしていると思われるものは、それが兄弟であろうと、父であろうと、子供であろうと、自分の愛している者であろうと、自分を愛してくれる者であろうと、これを憎み、これを見棄て、これを呪うのだ。本来自分の利益を愛するほどは、何物をも愛しないようできてゐるからだ。<sup>(39)</sup>

エピクテトスがいうように、われわれは「自分の利益」になるかどうかの関心に最も支配されている。われわれは、自分の利益を邪魔するものを何であろうと呪い罵る。

<sup>(40)</sup>この章では、「首飾り」という所有欲の象徴が述べられる。それに目がくらみ家族の関係が破壊される。これ

は「自身の利益を、自己の権内に置くのではなく、外界に置く」ことからくる悲劇を描写しているのである。

自分の興味や利害関心を、外のものへ振り向けてまるで所有物であるかのように振る舞う。それでは、本当の意味で他者との関係が成立することはないのである。清沢が書写した所を見てみよう。

彼ら自身の利益をどこに置くか、外界に置くか、意志に置くか、どっちかということだけを吟味するがいい。もし彼らが外界に置くならば、彼らを誠実であるとか、危なげがないとか、勇敢であるとか、自由であるとかいふべきではないと同様、友人ともいふべきではない。むしろ君に分別があるならば、彼らを人間とさえないべきではない。…中略…だがもし君が、これらの人々が本当に善を意志のある処、心像の正しい使用のある処、そこだけにあるのだと思つてゐるのを聴くならば、君はもはや彼が息子や父であるかとか、兄弟であるかとか、長い間学校へ一緒に通つた者で仲間であるかとかどうかということに、心を煩わすことはないだろう。むしろただそれさえわかれば、彼らを誠実で正しいと公言するように、彼らを友人であると堂々公言するがい

い。

(鹿野治助訳『人生談義』上、p.223)

この文では、どこで「友」ということが成り立つのかを教えている。「友」とはお互いが外界の物事に執着しそれらを利益の対象としているような関係には成り立たない。真の友が成り立つことは、すべてのものが互に外界の事物に自己の利益を置き、それに執着心を抱いている世界ではありえない。野獸的な考えを抱き、外物を所有物としている限り真の友人とはならない。<sup>(42)</sup>外界のものに追い求め野獸的に友情を裂く。その考えを、憎み断ち切り、放逐するべきである。<sup>(43)</sup>

つまり外物を自分自身の根柢に置くのではなく、意志に置くべきであるという。そうすることで、どんな関係の人であろうと「心を煩わすことはない」という。どんな立場の人でもどんな関係の人でも、真の価値観において、友という立場で接することである。

清沢も同じように、真宗中学の生徒へ向けて語った。いかなる人物にたいしても、またどのような範囲の人にたいしても「同胞（同朋）主義の觀念によりて和合の心を修養すればよい」と。<sup>(44)</sup>

清沢の「真の朋友」という論考を見ると、

世俗の所謂朋友は、相對有限の根柢に立つがゆへに、常に不足を感じて止まないが為に、朋友を求めて其欠陥を補はんとすることである、然るに、此の如きことは、一寸成功する様な場合もあれども、其根柢が不完全であるから、何時互に相離反し相侵害する様になるかも知れない、真に危険なことである

〔全集〕7-p.312)

自分に宗教的信念の確立を求むるのである、自分の精神に於て、絶対無限に信憑して、毫も外物他人に依頼せずして安心し得る丈の資格を求むる（同前）と述べられる。つまり、相對有限を根柢とし、外物他人を追い求めてそれに依頼することでは不完全であり、危険である。無限への信仰によってかえって、有限なる外物他人に執着しないことに「真の朋友」という事が成り立つと考えたのである。それは真の自己が明らかになったものの関係である。このように、エピクテトスの思想に清沢は真の人間関係を創造するための種を見つけたのであった。

## 結論

『臘扇記』といういとなみにおいて、エピクテトスカ



ら学んだもの、それは死の恐怖と死生の苦悩への克服と、そのいとなみが他者とともにある真の関係性を見出すのだ、というものであった。外界のものを追い求め執着するのではなく、意志によることによって真の他者関係が成り立つ。

むしろ、清沢のとった視点は、自己の求めるべきものや自己への関心の持ち方がはつきりしたところでない、真の人間関係は成り立たないという倫理的視点であったのではないかと考えたい。今後は、清沢が『臘扇記』から多用するようになる「服従」の用語を考察していきたい。「服従」という用語は、清沢の『臘扇記』から最晩年の思想を読み解くための非常に重要な語句であると考えるからである。

### 【凡例】

一、テキストの略記は以下の通りである。

・大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店）第一巻、一頁

→『全集』1-p.1

・*The Discourses of Epictetus : with the Enchiridion and Fragments*. Translated, with notes, a life of Epictetus, and a view of his philosophy by George Long (1801-1879), London : George Bell and Sons, 1877.

→ *Epict.*

一、BOOK I CHAPTER I

→ Bk. I, Ch. I, 2略記した。

一、カタカナ表記は読みやすさを考慮してひらがなに変更したものである。

### 註

(1) 「〇余や昨今咯血不停なれとも只少しく静黙を勤むるのみにして起居動作毫も変ずる所なく或は却て心意の快然に於て益す所あるを感す 蓋しエビクテート氏の所謂病に在ても喜ぶ者に達せざるべしと雖とも幾分之に接近するを得たるもの乎 読書の恵亦大なる哉」(明治三十一年十一月十六日『臘扇記』『全集』8-p.385)

(2) 『全集』8-p.441

(3) 『全集』8-p.363

(4) W. S. Yokoyama, "Editing Epictetus Kiyozawa Manshi's Rosenki and Long's Discourses of Epictetus," 『花園大学文学部研究紀要』一九九八年 pp. 61-2

(5) cf. 『清沢満之語録』岩波書店、二〇〇一年 p. 177. / 『清沢満之と哲学』岩波書店、二〇〇四年 pp. 131-5.

自己配慮は、実質的には、ストア的な「死の配慮」であった。死とはいつか死ぬであろう死であるには違いないが、ストアの倫理では、可能的な死が現在にあり、現在の生が死に押し迫られた死であり、つまりは臨終の生である。死を想起するとは、死がまさに生のなかにあることを「慮る(cura)」のべ

ある。清沢がストアから学んだのは、まさにこの論点であった。死の現前、すなわち臨終とは、毎日の人生のなかに死を先取りに引込み、自分で自分に對して表象的に死を与えることである、つまり自分の死のイメージを生き生きとした形で与えるのである。それはけっして簡単なことではないからこそ、修練（修行）とよぶことができる。

〔清沢満之と哲学〕p.134)

- (6) 今村は、人間（世俗内的、社会的人間）の定義を、「他人に對して我の優越を誇示する虚栄心」をもち、「他人の欲望を欲望する」「自我的欲望」存在であるとする。その虚栄心は他人への承認欲望であるがそれで人間は満足できない。そこで自我的欲望を除去しようとする生き方を求められる。そこに、清沢はストア派の「死を覚悟する」(メレーテ・タナトウ (melete thanatou) 死を憂いつつ思う)、未来の死を先取りに現前させ、あたかもいま死につつあるかのように日々を送る」という態度の修練(アスケーシス)を学ぶ、とする。

この論理の行き着く先が、死を覚悟して生きるということである。…中略…

死を覚悟したものにとつて所有(私的所有として財産)への執着はないから、すべてを他者に分け与えることができる。所有か無一物かというのは、自利他論のひとつの具体的でわかりやすい例証ではないが、しかしこれは利他行為にとつて決定的である。それは人間の存在の根源に内在する贈与論理

の具体化である。

〔清沢満之と哲学〕p.133)

などと論じている。

- (7) 加来雄之「臘扇記といふいとなみ」『臘扇記 注釈』法蔵館、二〇〇八年 p.234

- (8) 『同前』

- (9) 住田智見は清沢の「予の三部経」として三者を挙げ、赤沼智善も「余の三部経」といつて同様の三つを挙げる。稲葉昌丸は「先生在世の日、常にその机上にありし書三あり、『阿含経』なり、『歎異抄』なり、『エピクテタス』なり。」と記憶している。さらに清沢がエピクテタスを『西洋第一の書』としていたと述べている。(稲葉昌丸『エピクテタスの教訓』浩々洞、一九〇四年p.)を参照。

- (10) 『転迷開悟録』『全集』2-p.187.

ちなみに生死という仏教的な言葉と、死生という一般的な儒教的な言葉の区別は、「生死巖頭」という論考を見る限りではない(『全集』6-p.206を参照)。

- (11) 新法主への御進講の覚書(『御進講覚書』『全集』7-p.188-202)はそれらの經典を用いて講義をしたことを知ることができるので、その辺りも含めて研究していくことも今後の課題としたい。

- (12) 二十三日の夜、郊外散歩として外出後、本山には帰らず、新法主・大谷光演と浄暉院・大谷登亮は東京へ、能浄院・大谷登誠は台湾へ、慧日院・大谷勝信は清国北京へと、新法主及三人の連枝はそれぞれ旅立った。

(13) 明治三十一年九月七日『教学報知』87参照。そこには石川舞台、平野履信の二名が黒幕として挙げられる。

(14) 明治三十一年九月一日『教学報知』84参照。

(15) 明治二十四年四月に、当時の本山執事、渥美契縁に連名で建言書を提出している。その一人に清沢も「徳永満之」として出ている。「岡崎御学館ノ儀ニ付」『全集』7-p.163-6)

(16) 明治三十一年九月九日『教学報知』88参照。ちなみに、清沢はよく話が難しく、話すのが下手だったとされることがあるが、逆に聴衆が涙を流すほどの迫力のある演説をしたというエピソードも存在している。また『臚扇記』には「演説序銘」として自らの演説のための自戒を日記丸々一ページに堂々とした大きな文字で記している。演説前に必ずこれを読みあげてから演説に向かうという心構えが記されている(『全集』8-p.340)。

(17) 清沢が読んだエピクテトスのテキストについて少し述べておこう。清沢はエピクテトスとの出会いをこう語っている。

エピクテタス氏は、小生が十数年来追慕して居た哲人でありますが、特に肺病にかかりて後、専ら精神の修養を思うこと盛なるに従うて弥追慕の念が切になりました。しかるに、氏の伝記等は極めて乏しくありまして、近年迄は一向、其人に就て知る所がなくて苦んで居りましたが、去る三十一年の秋に東京へ参り沢柳政太郎氏を尋ねました節、フト其書架中に「エピクテタス講話」と題する一書を発見しま

して、直に借り受けて参りまして、爾来、幾回も之を通読し、其の意義に就て知人にも話し杯して楽しんで居ることあります。然るに、本年五月に至り、更に一同人の手を経て「エピクテタスの教旨」と云う一本を得まして、之をも反復読誦して居ります。

『エピクテタス氏』『清沢満之集』pp.23-4 / 『全集』6-p.313)

この彼の言葉から、彼自身、二つの本を手にして読んでいることがわかる。一つは清沢が「エピクテタス講話」と呼ぶ書物である。これはエピクテトスの言葉を弟子のアリアノスが筆録したものがある。清沢は、明治三十一年に英訳本を沢柳政太郎の書架から借り受けている。

*The Discourses of Epictetus : with the Enchiridion and Fragments.* Translated by George Long (1801-1879) である。ジョージ・ロング訳『エピクテトスの語録』提要、断片』である。この書はエピクテトスの弟子アリアノスの筆録(「語録」と、その要点の抜粋である「提要」と、散見するものを集めた「断片」)からなり、ジョージ・ロングが英訳したものである。

現在、日本語訳は、ラテン語版からの訳出で、鹿野治助訳『人生談義』上・下(岩波書店、一九五八年)があるので参照した。明治三十一年の清沢の日記『臚扇記』には、この書の引用が多数あり、また彼が亡くなる一年前に記した『当用日記』の一節に「三十一年九月東上、沢柳氏に寄宿し、同氏蔵書中より、エピクテタス氏教訓書を借来す。」と記されている。清沢が「エピクテタス

講話」と「エピクテタス氏教訓書」という呼び方をして  
いる二つの名の書は、時期の関係からも同一のものであ  
ると考えるべきであろう。その書を読んで「頗る得る所  
あるを覚え」と当時を回想して記されている。このよう  
に彼の思想に大きく影響を与えたことが知られている。

もう一つは「エピクテタスの教旨」という書物を得た  
と記されている。これは *The Teaching of Epictetus, Being the 'Enchiridion of Epictetus', with Selections from the 'Dissertations' and 'Fragments', Translated from the Greek, with introduction and notes, by T. W. Rolleston (1857-1920), London: Walter Scott (The Scott Library)* であり、大谷大学に所蔵されている本書には  
「明治卅五年五月十一日本郷区本郷大和屋ヨリ購入 清  
沢満之所蔵」との書入がある。ちなみにこの書は清沢の  
死後、彼の親友であった稲葉昌丸が翻訳して、「エピク  
テタスの教訓」として浩浩洞から出版された。その本に  
は清沢が「西洋第一の書」としたことが書かれ、清沢が  
大切にした書であったことがうかがえる。

『臘扇記』に引用された書は、前著書の *The Discourses of Epictetus* で、後者は当時まだ見ていなか  
った。また清沢は *The Discourses of Epictetus* のロンク  
の解説「The Philosophy of Epictetus」にも注目し、そ  
れも『臘扇記』に引用している。

- (18) *govvotoc* と言われるもの (*Epict.* p. 439, 『断片』九 (一  
八〇) (ゲリウス) など)。このギリシヤ語は「表象」な  
どと訳される。ジョージ・ロンクによれば、appearances

impression, phantasy, などの語を使って説明している。  
そして「この想像 (*govvotoc*) は、視覚によって捉えられ  
るものだけではない。視覚によって作られた印象や、一  
般に感覚機能によって受けたすべての印象を意味する。  
また、精神内に現在するだけで本当には不在であるにも  
かかわらず、まるで現在するかのように、物事を表現す  
る精神的な力である。想像のこの力は、また動物にも、  
それぞれに備わっている能力に従って様々な程度に、存  
在する。動物たちは心像を使用する。しかし人だけが心  
像の使用を理解するのである。」(cf. *Epict.* p. xxviii.) と  
解説する。

また、エピクテトスは、基本的には心像 (印象) を支  
配的に使用して行動する能力は、人間にも動物にも備わ  
っているが、「心像を吟味し理解する能力、正しく心像  
を使用する能力」(＝理性的能力) は人間のみならず、  
与えられたものであるとしている。しかし、ジョージ・  
ロンクは注においてアリなど、人間以外の動物の行動動  
中にもその能力があると主張することもできるだろう、  
としており、この理性的能力という点で動物、人間を峻  
別するのは完全にはできないという立場も認めていると  
思われる。

鹿野治助は、『人生談義』において、*govvotoc* に対し  
て「心像」という訳語を当てている(ただし、論文「エ  
ピクテトスの哲学」(『京都工芸繊維大学 工芸学部研  
究報告 人文』一九五二年)では「表象」と訳してい  
る)。私は、この論文では「心像」という言葉に従うこ

とにする。

また『*Epicet. Bk. I Ch. XXVII. "IN HOW MANY WAYS APPEARANCES EXIST, AND WHAT AIDS WE SHOULD PROVIDE AGAINST THEM."* p. 80.』は、  
以下のように、心像を規定している。

①存在し、また存在していると思われるもの。②存在しないし存在しているように見えないもの。③存在しているが存在しているように見えないもの。④存在しないのに、存在しているように見えるもの。の四種である。  
〔『人生談義』上、第一巻第二十七章「心像の種類と、それらに準備すべき救助手段」より〕このように、すなわち、心像とはわれわれの心に映し出される様々なものを言ひ表している。

(19) しかし彼は快苦を否定したわけではない。真の快とはロコスに生きることである。

「人間の本領はロコスにあるのであるから、人間らしく保持するところとはロコスの体面を保つことであり、付属物である物や名や肉体を保つことではない。故に肉体においては苦痛でも、快べあり得る。俗に言う痛快ではないが、一種の快感である。ロコスにはそういう快が伴う。」〔『エピクテリウスストア哲学入門』p. 115〕

(20) 『*Epicet. p. 178*』『人生談義』上 p. 223.

(21) 『全集』8-p. 400.

(22) 『*Epicet. Bk. I Ch. I. "OF THE THINGS WHICH ARE IN OUR POWER, AND NOT IN OUR POWER."* cf. 『人生談義』上 pp. 14~ / cf. 『*Epicet. "THE ENCHEIRIDION,*

OR MANUAL." p. 379. (提要) 45)』

(23) 『全集』8-p. 356.

(24) 「rational faculty」他に「その能力の事を「自分自身を考察」、また他の一切を考察するもの」、「正しく心像を使用する能力」と言ひ換えている。(いずれも『*Epicet. pp. 3-4*』『人生談義』上 p. 14参照。)

また神から与えられた理性的能力によつて、自身の心像を判定し、使用するところ、側面を言ひ当つて、意志 (*proairesis*=will, choice) と称している。エピクテリウスにとっては、意志と、理性は同一の二側面である。

(25) 第二巻第二十三章「語る能力について」〔『人生談義』上 p. 228参照。cf. 『*Epicet. p. 182*』

(26) 『人生談義』上 p. 15. 『*Epicet. p. 4*』

(27) 『全集』8-p. 356参照。"But if you attempt to avoid disease or death or poverty, you will be unhappy." 『*Epicet. p. 380*』の意をくみたる清沢の訳出。

(28) 以下の文の趣意。"Take away then aversion from all things which are not in our power, and transfer it to the things contrary to nature which are in our power." (『*Epicet. p. 380*』) とする。死などの自然の道理なるものを嫌うことを去ると説く。反自然的なものを避け。自然的なもの避けなるところである。

(29) "Where then is progress? If any of you, withdrawing himself from externals, turns to his own will (*proairesis*) to exercise it and to improve it by labour, so as to make it conformable to nature, elevated, free, unrestrained,

unimpeded, faithful, modest.” (*Epic't.* p. 16)

- (30) “In every circumstance I will maintain, she says, the governing part conformable to nature.” (*Epic't.* Bk. I Ch. XV. “WHAT PHILOSOPHY PROMISES.” p. 49) (『人生談義』上 p. 68)

- (31) 指導能力 (支配能力) τὸ ἡγεμονικόν the governing part the ruling faculty) とは「人間の魂の「指導能力」。知性的、感情的、意志的なものの「良心」の意味でもあり、或る場合には理性とか知性、或る時には意志の意味で用いる」ものであり、自己自身の知性、感情、意志を指導し支配する能力をいふ。

- (32) *Epic't.* Bk. II Ch. XVIII. “HOW WE SHOULD STRUGGLE AGAINST APPEARANCES.”

- (33) 『臘扇記』の引用では、明治三十一年十月三日である (cf. 『全集』 8-p. 354)。また書簡において、少なくとも四人の友人にその文を送っている。すなわち、月見寛了・清川円誠・草間(関根)仁応・稲葉昌丸宛の四氏である (cf. 『全集』 9-p. 172-8)。

- (34) 死の課題に「つづつ」次の文も『臘扇記』から参照しておわす。

① (明治三十一年十一月十一日)  
“I depart to the place where no man will hinder me from living, for that dwelling place is open to all: & as to the last garment, that is, the poor body, no one has any power over me beyond this.”

(*Epic't.* p. 75 / 『全集』 8-p. 377.)

「私は、住むのに誰も邪魔しない処へ去ろう。というのは、その住家(死)は、何人にも開かれているからだ。そうして最後の下着 すなわち肉体(を脱ぎ去る)これ以上は誰も私に対して何ら力を持つていなす。」

(鹿野治助訳『人生談義』上 p. 99)

- ② (明治三十一年十一月十二日)  
“True philosophers make it the whole business of their lifetime to learn to die. Phaedo, p. 57.”

(『全集』 8-p. 378.)

「本当に哲学にたずさわっている限りの人々は、ただひたすらに死ぬこと、そして死んだ状態にあること、以外のなにひとつをも実践しない【のだが、このことに恐らくは他の人々は気がついていないのだ。】」

(岩田靖夫訳『パイドン』 p. 29.)

- (35) 『全集』 7-p. 291-2

- (36) *Epic't.* Bk. I ch. 3 p. 12. ショージ・ロングの「神」についての注記 1

“Epictetus speaks of God (ὁ θεός) and the gods. Also conformably to the practice of the people, he speaks of God under the name of Zeus. The gods of the people were many, but his God was perhaps one. “Father of men and gods,” says Homer of Zeus.” (エピクテトスは神 (ὁ θεός) と神々に「つづつ」語をする。またそこに住む人びとの慣習に従って、ゼウスの名で神について語る。その住民たちにとっての神々は多数であったが、彼にとっての神は「つづつ」であったかもしれない。

「人びとと神々の父」と、ホメロスではゼウスについていう。)

- (37) 寺川俊昭「願生の人・清沢満之―乗托妙用の自覚から避悪就善の意欲へ―」(『親鸞教学』六三、一九九四年)など多くの先学に指摘されている。

またこの文が『精神界』へ「絶対他力の大道」と題し多田鼎によって引用された際には「避悪就善の意志」が切り捨てられている。

- (38) 「本位自分の自覚」『真の人』(大日本仏教婦人会、明治三十四(一九〇一)年四月十八日発行)『全集』6-p. 342.

- (39) 『人生談義』上 p. 223. cf. *Epicit.* p. 178.

- (40) 『人生談義』上 p. 226. cf. *Epicit.* p. 181.

- (41) (明治三十一年十一月十三日『臘扇記』引用文該当箇所本文。)

“but examine this only, wherein they place their interest, whether in externals or in the will. If in externals, do not name them friends, no more than name them trustworthy or constant, or brave or free; do not name them even men, if you have any judgment. But if you hear that in truth these men think the good to be only there, where will is, & where there is a right use of appearances, no longer trouble yourself whether they are father or son, or brothers, or have associated a long time and are companions, but when you have ascertained this only, confidently declare that they are

friends as you declare that they are faithful, that they are just.” (『全集』8-p. 382. cf. *Epicit.* p. 180.)

- (42) “but neither will they be friends nor you, so long as you retain these bestial and cursed opinions.” (*Epicit.* p. 181.) の文を参考とした。

- (43) “cut out these opinions, hate them, drive them from his soul.” (*Epicit.* p. 181.) の文を参考とした。

- (44) 『心靈の諸徳』『全集』7-p. 307.

#### テキストと主要参考文献

- ・大谷大学編『清沢満之全集』岩波書店、二〇〇二―三年。
- ・*The Discourses of Epictetus : with the Enchiridion and Fragments*. Translated, with notes, a life of Epictetus, and a view of his philosophy by George Long (1801-1879). London: George Bell and Sons, 1877.
- ・清沢満之『影印本 臘扇記』第一号・第二号
- ・*The Teaching of Epictetus. Being the ‘Enchiridion of Epictetus’, with Selections from the ‘Dissertations’ and ‘Fragments’*. Translated from the Greek, with introduction and notes, by T. W. Rolleston (1857-1920). London: Walter Scott.
- ・稲葉昌丸訳『エピクテタスの教訓』浩々洞出版、一九〇四年。
- ・鹿野治助訳『人生談義』上・下、岩波書店、一九五八年。
- ・鹿野治助『エピクテトーストア哲学入門』岩波書店、一九七七年。

- ・今村仁司編訳『現代語訳 清沢満之語録』岩波書店、二〇〇一年。
- ・大谷大学真宗総合研究所〔編集・校注〕『臘扇記 注釈』法蔵館、二〇〇八年。
- ・清沢満之著、安富信哉編、山本伸裕校注『清沢満之集』岩波書店、二〇一二年。
- ・西村見暁『清澤満之先生』法蔵館、一九六〇年。
- ・寺川俊昭『清沢満之論』文栄堂、一九七三年。
- ・安富信哉『清沢満之と個の思想』法蔵館、一九九九年。
- ・神戸和磨『清沢満之の生と死』法蔵館、二〇〇〇年。
- ・藤田正勝・安富信哉編『清沢満之 その人と思想』法蔵館、二〇〇二年。
- ・今村仁司『清沢満之の思想』人文書院、二〇〇三年。
- ・今村仁司『清沢満之と哲学』岩波書店、二〇〇四年。
- ・箕浦恵了『清沢満之と宗教哲学―近代日本の学問形成史小景』法蔵館、二〇一三年。
- ・鹿野治助『エビクテートの哲学』京都工芸繊維大学工芸学部研究報告人文』一、一九五二年。
- ・W. S. Yokoyama, "Editing Epictetus Kiyozawa Manshi's *Rosenki* and Long's Discourses of Epictetus." 『花園大学文学部研究紀要』一九九八年。
- ・奥 貞二『エビクテートの哲学』『紀要』40、二〇〇七年。
- ・加来雄之「臘扇記といういなみ」『臘扇記 注釈』法蔵館、二〇〇八年。